

Current Account Dynamics under Information Rigidity and Imperfect Capital Mobility

京都大学 柴田 章久

東京大学 新谷 元嗣

大阪大学 敦賀 貴之

多くの先進国では、経常収支の変動は、所得対比で見て慣性とボラティリティが非常に高い。異時点間経常収支モデル(intertemporal current account model)は消費理論に基づく経常収支の標準モデルとなっているが、この標準モデルでは、経常収支の慣性やボラティリティは非常に低く、加えて消費の変化の慣性の説明力も低い。この標準モデルに不完全資本移動の仮定を導入した Shibata and Shintani (1998)のモデルでは、消費の変化の慣性の説明力は改善するものの、経常収支のボラティリティの説明力が低下してしまう。

本稿では、異時点間経常収支モデルにおける合理的期待の仮定を粘着情報の仮定で置き換え、粘着情報に基づくモデルの経常収支の予測パフォーマンスを評価している。このモデルでは、消費者は所得に対するショックに即座に気づかず、ショックに応じた消費の意思決定が随時行われないと仮定される。分析の結果、粘着情報のモデルは、経常収支の慣性とボラティリティについて、合理的期待のモデルよりも優れた予測パフォーマンスを示すが、消費の変化の慣性の予測はデータよりも過大となりがちになることが分かった。他方、粘着情報のモデルを不完全資本移動の仮定で拡張したモデルの場合、情報の粘着性の度合いと不完全な資本移動の度合いを十分に考慮すれば、経常収支の慣性・ボラティリティにくわえ、消費の変化の慣性もデータとほぼ完全に整合的な予測パフォーマンスを示せることが分かった。